

令和7年度 北海道小学校長会地区活性化支援事業【実践事例レポート】

- 1 報告地区：後志地区
- 2 事例報告学校名：寿都町立寿都小学校
- 3 報告者職・氏名：校長 三和 史朗
- 4 キーワード：セカンドステージ

1 はじめに

寿都町はかつて南後志の中心をなし、ニシン漁を始め漁業で栄えた町である。昭和30年に寿都町・樽岸村・歌葉村・磯谷村の1町3村が合併し、往時は人口1万人を擁したが、高齢化社会のため、過疎化が進み児童数も年々減少している。寿都町の産業は、今でも水産業が主流であり、水産加工が盛んである。

本校は、明治11年9月に、地域住民の子弟教育に対する熱意により、「中歌小学校」として誕生した。以来、明治・大正・昭和・平成・令和と五代にわたり、最盛時には在籍児童数1,000人を超えるなど、14,000余人に及ぶ卒業生を送り出している。

2 コミュニティ・スクール導入の経緯と現在

本校は、平成24年度に「コミュニティ・スクールの導入促進、充実・改善に関する調査・研究事業」（文部科学省指定）を受け、学校運営協議会推進委員会を設立。2年間の準備期間を経て、平成26年度には「コミュニティ・スクールのマネジメント力強化に関する実践研究校」（文部科学省指定）を受け本格始動した。

管内的にも一番最初にコミュニティ・スクールが導入された経緯もあり、現在では次ページの図にあるように、「地域とともにある学校」×「学校を拠点とした地域」という、「支援」から「連携・協働」のセカンドステージに移行してきている。

3 コミュニティ・スクールから生まれた遠足「ぐるっと寿都」

令和4年度の定例学校運営協議会で、「もっと、地元寿都のことを知ってもらえる取組はないだろうか」という学校運営協議会委員の声から、「遠足で寿都のいろいろなところを訪問してみるのはいかがか」というアイデアが出された。そこで、令和5年度の遠足から、1～6年生の縦割り班で、寿都の商店や施設など9か所をめぐるスタンプラリー形式の遠足「ぐるっと寿都」が始まった。以後、毎年4月に行われる第1回定例学校運営協議会では、今年のおすすめスポットを委員が出し合い、ワークショップ形式で学校に提案している。

子どもたちは、遠足当日までどこを訪問するか知らされていない。出発の後、グループのリーダーがくじを引き、その場で指定された場所をどの順番で回るかメンバーで相談する。1年生から6年生までがアイデアを出し合い、協力してスタンプラリーを成功させるのである。

訪問先はあらかじめ、コミュニティ・スクールコーディネーター（町教育委員会職員）と学校側で依頼。当日は、訪問してきた子どもたちに、お店の裏側を紹介してくれたり、中を案内してくれたり、体験的に地域を学ぶことができるよう配慮していただいている。



寿都町役場では町長室に



寿都高校では校長室に



今年度は、新たに道内で一番古いケーブルテレビ放送局の寿都テレビなどが訪問先として追加。毎年少しずつ変わる訪問先に、子どもたちは楽しみながら地域を学ぶことができています。

4 学校間連携もセカンドステージに

寿都町は2小1中中で組織する寿都町教育研究会と、寿都高校を加えた「小中高連携推進委員会」の二つの組織があった。それを、今年度は「寿都町教育機関連絡協議会」として再編し、スリム化を図った。良い取組は残しつつ、重複していた内容を統合することによって、効率的に連携を推進することができている。

中でも、小学生から高校生までが一堂に集まり、ふるさと寿都について話し合う「キャリア発表会」（右写真）は、毎年様々なテーマについて話し合う、ワークショップ型の取組となっている。高校生がファシリテーターとなり、昨年は「あたらしい寿都のゆるキャラを考えよう」といったテーマについて話し合った。異世代の交流が、コミュニケーション能力の育成につながり、地元愛も育むことができています。



寿都テレビではスタジオに



キャリア発表会

5 おわりに

寿都町は、良いものは残し、新しい風を取り入れる風土がある。その地域性を生かした学校教育をこれからも継続していきたい。